



平成15年11月4日(火) 第320回史跡めぐり

紅葉狩り

心頭滅却 恵林寺へ

越谷市郷土研究会



○第三二〇回 史跡めぐり

紅葉狩り・心頭滅却・恵林寺へ

平成15年11月4日（火）

JR南越谷駅前／午前7時30分

コース JR南越谷駅前＝雁坂峠＝

恵林寺＝放光寺＝

／時間があれば……／

甲斐善光寺＝武田神社＝

中央高速道＝JR南越谷駅前

参加費 7千円

ご案内 幹事長 宮川進

武田軍旗「孫子の旗」一旒

指定年月日 昭和55.9.18 県指定
材質・区分 紺地緋色、歴史資料
法量・形状 幅382cm、79cm、輶り旗

戦国の武田軍がつねに陣頭に押し立てた軍旗と伝えられ、近年は「風林火山の旗」として一般化された呼び方となっている。紺地の平織絹地に金泥で古代中国の兵法書「孫子軍争篇第七」の七言絶句二行詩14文字が大書されている。縦長の輶り旗で大きさは3.82メートル、横幅は79センチあるが、「甲陽軍鑑」に「地絹、二幅緋、文字金粉両面、長一丈二尺二寸五分」とあり、メートル換算もほぼ同寸法になる。旗の文字揮毫者についても「軍鑑」は「伝ヘテ曰ク、孫子ノ語、惠林寺快川国師ノ書ナリ。文字ノ大キサ凡ソ一尺ナリ」とある。つまり信玄はもっとも畏敬する快川和尚の揮毫を得て武田軍の象徴としたものである。これだけの大旗であるから主として本陣旗として用いられたものと思われる。

疾如風徐如林侵掠如火不動如山

孫子の兵法書は紀元前五百年の古代中国・春秋時代末期に成立されたと伝えられる兵法の原典で、単なる合戦技術書ではなく人間の本性に対する鋭い洞察に基づいて書き記されたものといわれ、信玄は熟読していたものとみられている。この兵法書は始計篇から用間篇まで13篇あり、このなかの「軍争篇」の妙言が武田軍旗に表わされたものである。

原本は「一故に兵は詐を以て立ち、利を以て動き、分合を以て変を為す者なり。故に其の疾きこと風の如く、その徐なること林の如く、侵略すること火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くこと雷震の如し（後略）」とあり、孫子の兵法のかでも代表的な名言とされている。

武田軍旗 諏訪神号旗 一旒

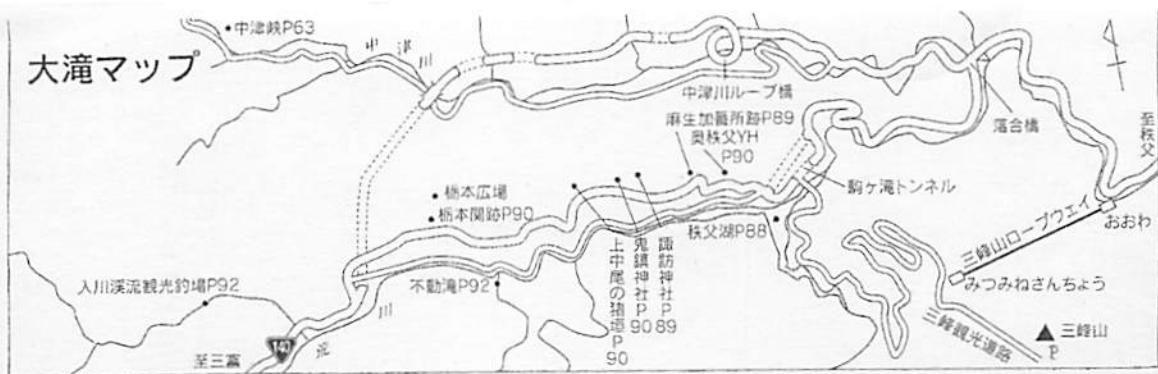
指定年月日 昭和55.9.18 県指定
材質・区分 紺地緋色、歴史資料
法量・形状 幅433cm、40cm、輶り旗

「孫子の旗」とともに武田の軍旗として用いられた諏訪神号旗は、別に戰勝祈願の旗じるしともいわれ、信玄が軍神として尊崇する諏訪明神（長野県諏訪市諏訪大社）の英武にあやかって、諏訪明神旗、諏訪梵字旗の三種類の総称もある。赤地平織の絹地に金泥をもつて「南無諏訪方南宮法性上下大明神」の13文字が大書されている。

「甲陽軍鑑」に武田旌旗のこととして「諏訪方法性ノ旗ト称ス。地絹赤、文字金粉、一丈二尺二寸五分、幅一尺三寸四分、但シ曲尺ナリ」と記されている。メートル法で換算すれば実際は軍鑑記述の寸法よりやや大きめであるが、これは裏打ちの部分が計測されているため旗自体はほぼ同寸法といえる。

信玄の諏訪信仰は、晴信時代の天文11年（1542）9月24日に伊那地方で神社領百貫文の土地を寄進している（『守矢家文書』）ことでも明らかのように熱烈な信奉者であった。父信虎を駿河に強制的に退隠させたあと南信諏訪を攻略した直後のことであり、神仏に対する純粋な信仰心からとみるものの、諏訪明神を信仰することで諏訪家旧臣の反抗を抑え人心収攬策の計算のうちにあってのことだった部分も多少あったことは否めないところである。上下大明神は諏訪大社上社（諏訪市）と春宮・秋宮の下社二社（下諏訪町）を意味しているが、「塙田下之郷明神（諏訪明神）」（長野県上田市下之郷）など諏訪明神社は全国的に鎮座、とくに関東一円に多く、いわゆる「お諏訪信仰」といわれるよう、かつての武神信仰にかわっていまでの農漁業・狩猟・蚕業の祭神とされ信仰を集めている。

大滝マップ



旧藩時代の役所跡

麻生加番所跡

荒川源流谷の左岸中腹を通る、旧秩父往還(旧国道140号線)沿いの麻生にある。寛永20年(1643)、栢本関所の業務を補うために設けられた役所の跡。当時は名主の家をそのまま役所とし、間口3・6m、奥行2・7mの番屋が付設されていた。

現在番所跡にある建物は、名主兼番頭を務めていた千島家の住宅で、間口17・1m、奥行7・2mの2階建て。安政4年(1857)の火災で焼けた後に再建されたもの。養蚕農家の造りになつている。番屋は現存しない。なお千島家は、鉢形城(寄居町)主北条氏邦の家臣、千島下総守の後裔といわれている。

現存する大村氏の役宅は、文政6年(1823)に失火で焼けたのち再建されたもの。その後2階を建て増しするなど改修されているが、玄関回りや上段の間、本棚、外部の木柵、庭木などが往時を偲ばせる。内部は非公開。

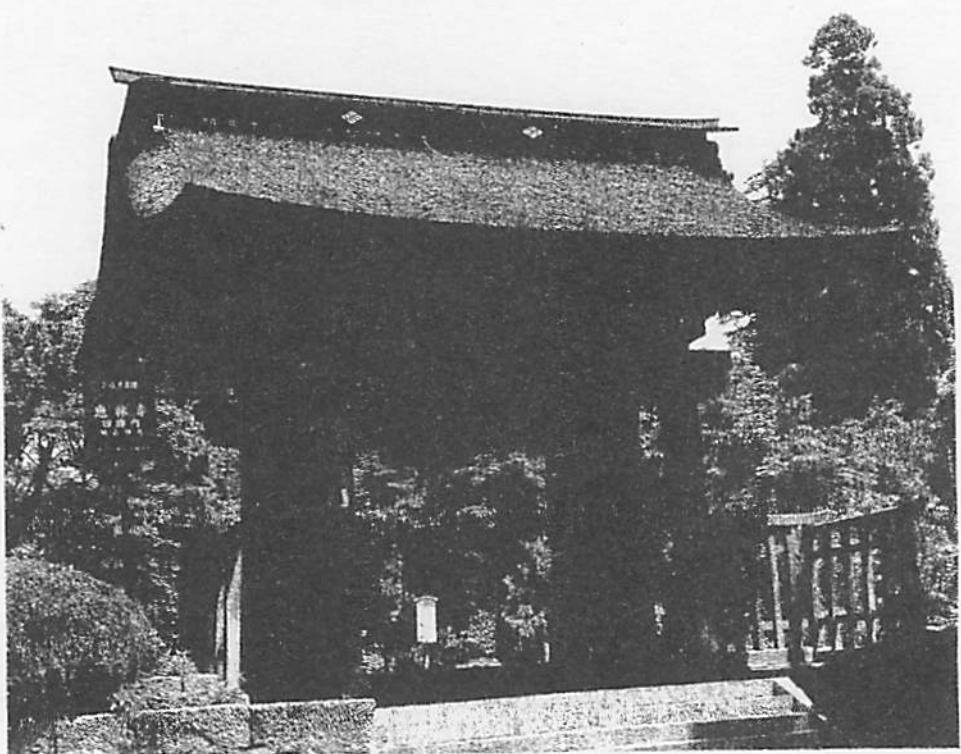


栢本関跡

栢本関跡

江戸時代、中山道と甲州街道の間道である秩父往還の取締りのために置かれた関所の跡。役宅が残っている。国史跡。

栢本関は慶長19年(1614)に開設され、栢本に逃れ住んでいた武田勝頼の遺臣、大村与一郎忠昌が、江戸幕府から関番に任せられた。以後、大村氏が代々関守となる。



しきやくもん 重要文化財四脚門（赤門）一棟

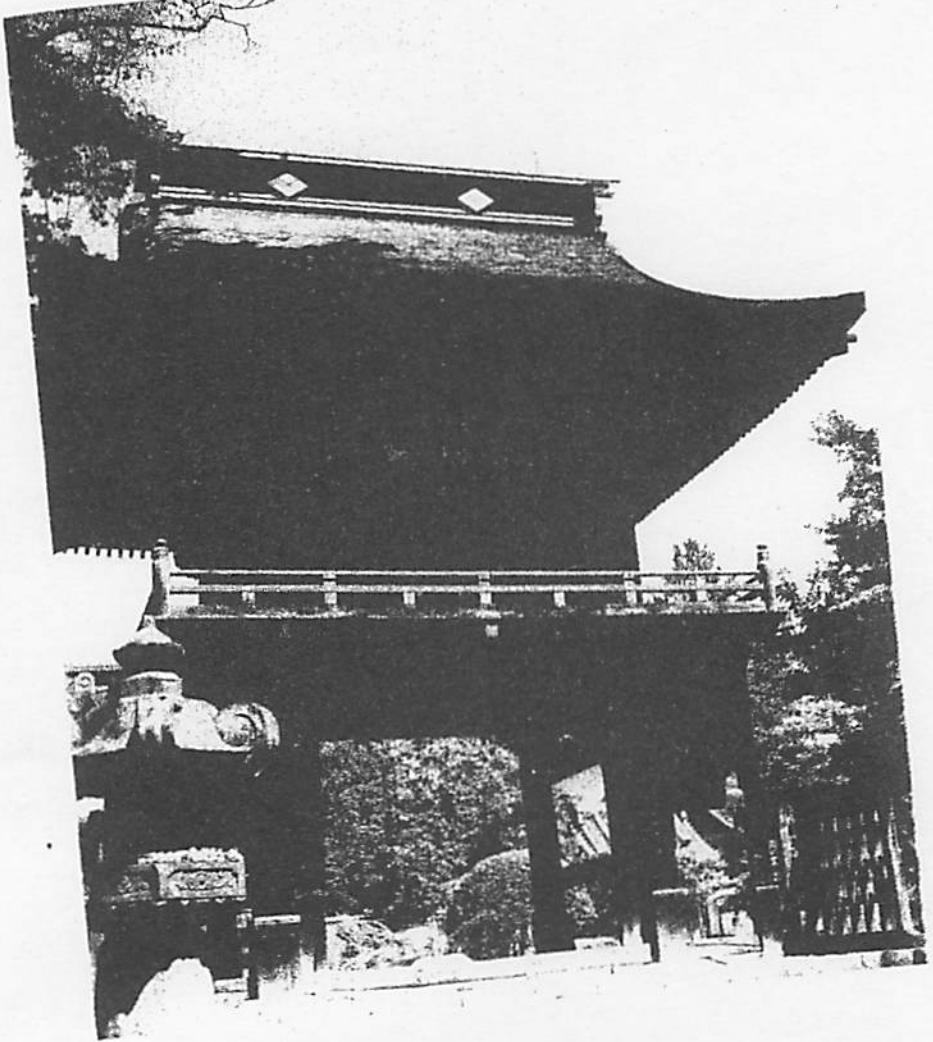
指定年月日 明治40.8.28 国指定
時代・構造 桃山時代、切妻造桧皮葺
法 量 柱行3.66m、梁行2.76m
軒高3.43m、棟高6.24m

武田信玄の菩提寺・乾徳山惠林禪寺に多くある建造物の中で、古い時代を物語る唯一の遺構である。惠林寺の主要建造物は禪宗寺院の形式に従ってほぼ南北にのびる一直線上に配置されているが、境内の中央部、また総門（通称黒門）と三門（三解脱門）の中間にこの四脚門が位置しているところから中門とも呼ばれ、また全体が朱塗りで装飾されているので一般的には赤門と愛称されている。

四脚門は切妻造り、桧皮葺きで、本柱・控柱とともに円柱には粽形が付けられ、柱下には石造礎盤がおかれている。中通しの本柱は控柱より太く大きく、これを桁行に通した頭貫でつなぎ、その上に台輪を架し、大斗・枠・実肘木などで組み、軒先を海老虹梁でつないでいる。このように極めて簡単な構架であり、また門自体も小規模ながら全体の木割りはまことに大きく、意匠も実に雄大で桃山時代の豪放な気風がみごとに表わされている。

惠林寺の記録によると、この四脚門は天正10年（1582）4月3日の織田勢による焼き打ち事件の際に、兵火を免がれたとあるが、昭和46年の解体修理の折に発見された棟札によって天正壬午の兵燹のあと、徳川家康の援助で伽藍復興に尽力した末宗瑞曷禪師（快川国師高弟）の手で、慶長11年（1606）に再建されたものであることが判明、さらに江戸中期の享保13年（1728）と幕末の文久3年（1863）および明治35年（1902）の三回にわたる大改修のあったことなども明らかとなった。この数回の改修によって建造当初の姿が著しく変更されていたため、昭和46年の全面解体修理では桃山時代の再建時の姿に戻すことに最大の苦心が払われた。明治40年の初指定では国宝だったが、戦後の文化財保護法で重要文化財に再指定された。

◎惠林寺の文化財と歴史 野澤公次郎著
(財)信玄公宝物館刊 H12.10



えりんじさんもん
恵林寺三門 (附棟札) 一棟

指定年月日 昭和 60. 3. 19 県指定
建立の年代 室町末～桃山時代初期
構造・形式 横門式、一間一戸、入母屋造、二階建、柿葺

天正10年(1582)4月3日、織田信長軍の包囲を受け、恵林寺はその焼き討ちで全山が灰燼に帰したおり、武田信玄禅学の師であつた快川和尚(諱紹喜、勅諡大通智勝国師)ら百余名の長老、山内子院僧侶、喝食(修行僧)が壮絶な火定を遂げた場所に建っている。

構造は一間一戸、横門形式。通常寺院の門はほとんど「山門」の文字を充てるが、これは本来仏教が山岳地帯に起こり、修行の道場たる寺院も人里に遊離した深山にあるべきところから山号を有したもので、寺院の門の総称として用いられるようになった。

恵林寺の三門の場合、「三門」と書くのは禅寺の場合、堂宇伽藍の配置が“禅宗様式”にのっとって総門から法堂(本堂または講堂)に至るまでを一直線上に配置、法堂前に位置した仏殿を法空・涅槃に擬し、そこへ入る端緒となる三解脱、すなわち空門・無相門・無作門の意による「三解脱門」を略して三門と称するものである。

構造細部について見ると、四本の隅通し柱は階下が角柱となっているのに対して階上部分を円柱とする技巧を凝らし、また実肘木・板肘木・木鼻などに見られる渦巻状の絵様は等円状になっており、これは明らかに室町末期～桃山初期に見られる名作技法とされる。小規模ながら総体的にあふれる重厚、莊厳さは同時代の建造物の中でも逸品とされる。市指定から県指定へ格上げされ、平成4年に屋根部分の解体修理が行われた際、かつては柿葺きであったことを示す痕跡が発見されたため原形復元が行われ、瓦葺き屋根からサワラ材の重ね葺きによる柿葺きとなつた。天正兵燹の折、快川和尚が三門楼上で「安禪不必須山水、滅却心頭自火涼」と遺偈し從容として焚死したという逸話のある三門は焼失して今は無い。

◎

二 快川紹喜の略伝

快川紹喜（？～一五八二）は、美濃（岐阜県）の出身で土岐氏を俗姓とする。関山派の禪僧で、仁岫宗寿に師事して法を嗣いだ。仁岫は、妙心寺四派のうち、悟渓宗頓を祖とする東海派にあって、独秀乾才の法系（独秀派）の人である。

その仁岫（妙心寺第二十七世）は、美濃の南泉寺の開山であつた。美濃国守護土岐頼純の招請を受けてのことである。快川紹喜は、仁岫に次いで南泉寺の第二世住持となり、さらに、妙心寺第四十三世住持となつた。

快川紹喜が甲斐（山梨県）に来たのは永禄四年（一五六二）であつたが、これより天正十年（一五八二）まで甲斐に活動した。

先記のとく、武田信玄は、天正元年（一五七三）に病死し、その死は三年にも及んで隠された。本葬は天正四年四月十六日であったが、惠林寺の快川が導師となつて盛大に営まれた。法名は、惠林寺殿機山玄公大居士と称した。機山の号を有する信玄であるが、その機山の号を与えたのは、快川であつたともいう。

武田信玄の位牌所となつた惠林寺であるが、快川が住持した時期には、二千人もの学徒が集まつたといわれている。しかし、惠林寺と快川は、武田氏の滅亡と運命をともにする。

天正十年（一五八二）三月、武田氏が滅ぶと、四月三日、織田の軍勢が惠林寺を襲い、快川と弟子百余名は山門楼上におし上げられ、火をかけられた。快川と弟子は、共に火中ににおいて焼死する。

その時、快川は、

安禪必ずしも山水を須はず

心頭滅却すれば火も自ずから涼し

安禪不須山水
滅却心頭火自涼

と、一偈を唱えた。



元号(西暦)	年齢	生涯と主な戦い
大永元(1521)	1	武田信虎の嫡男として甲府積翠寺の要害城に生まれる。幼名太郎。
天文2(1533)	13	上杉朝興の息女を娶る。翌年懷妊するも死去。
5(1536)	16	元服し、將軍義晴の偏諱を受けて信玄と名乗る。信濃佐久郡の戦いに初陣。
7(1538)	18	嫡男太郎(義信)生まれる。母は正室三条夫人。
10(1541)	21	父信虎を駿河に追放して自立する。
11(1542)	22	信州諏訪郡に進出。諏訪頼重を上原城に攻める。
14(1545)	25	上伊奈郡経略。高遠頼継を高遠城に攻める。続いて藤沢頼親を福井城に攻める。
15(1546)	26	勝頼誕生。母は諏訪頼重の娘。
16(1547)	27	甲州法度之次第を公布。佐久郡経略。佐久に侵攻した関東管領上杉憲政を破り志賀城を陥れる。
17(1548)	28	村上義清と上田原に戦い敗れる。小笠原長時を塙尻峠に破り、諏訪地方を回復する。
19(1550)	30	村上義清と戸石城に戦い敗れる(戸石崩れ)。
20(1551)	31	属将真田幸隆が戸石城を陥れる。
21(1552)	32	中信濃経略。小岩岳城を陥れる。
22(1553)	33	村上義清の葛尾城を陥れる。義清は上杉謙信を頼る。和田城・高島屋城・塙田城を陥れる。第1回川中島合戦。
23(1554)	34	南信濃経略。義信と信濃連撃。信玄は下伊奈郡。義信は佐久郡を平定。甲駿相の三者同盟を結ぶ。第2回川中島合戦。
3(1557)	37	葛尾城を陥れる。第3回川中島合戦。
永禄元(1558)	38	将軍足利義輝より信濃守護職に補される。
2(1559)	39	「信玄」の署名が初めて現れる。
3(1560)	40	海津城を築き、川中島支配の根拠地とする。加賀・越中の一向宗徒に越後侵入を促す。
4(1561)	41	第4回川中島合戦。
5(1562)	42	勝頼、諏訪家の家督を継ぎ高遠城主となる。
7(1564)	44	第5回川中島合戦。
8(1565)	45	織田信長の養女遠山氏、諏訪勝頼のもとに嫁ぐ。
9(1566)	46	西上野経略。箕輪城を陥れる。
10(1567)	47	嫡男義信自刃。甲駿相の三者同盟破れる。
11(1568)	48	駿河侵攻。府中を占領する。
12(1569)	49	上野侵攻。武藏鉢形城・滝山城を囲む。相模に入り小田原城を包囲。北条氏と三浦城に戦う。
元亀元(1570)	50	駿河侵攻。花沢城を陥れる。北条・今川連合軍と吉原・沼津で戦う。
2(1571)	51	駿河侵攻。興國寺城・深沢城を攻める。小笠原長忠を高天神城に攻める。勝頼と三河進撃、足助城・野田城を陥れる。徳川軍と二連木に戦う。
3(1572)	52	西上作戦開始。遠江に入り、二俣城を陥れる。岩村城を陥れる。徳川家康を三方ヶ原に破る。
4(1573)	53	三河野田城を陥れる。長篠城に入るが、病状悪化。信濃の駒場にて死去。



吉利虎泰
采配巧みな剛の者
上田原に死す

甘利虎泰
信虎、信玄の二代に仕えた侍隊将、板垣信方の軍略家としての采配ぶりに定評があり、青年時代の信玄に戦の駆け引きを実地で教えた。剛の者としても知られ、ひとたび戦場に躍り出れば先陣を争い、狂り狂う野牛のごとく大暴れすることで

敵味方から恐れられた。甘利隊の出撃と聞けば、敵は戦わずして敗走するという伝説もあるほど。
天文十七年、信玄は上田原の戦いで、地の利を知る村上義清軍と激戦を展開したが、強攻作戦が裏目に出で大敗を喫した。虎泰もこの戦いで華々しく戦死を遂げた。



真田幸隆

先方衆として最前線で活躍する
六連銭(六文銭)の旗印で知られる信州の名族真田氏は、この幸隆から起る。幸隆は信玄と共に感して忠誠を誓い、信州の先方衆として仕えた。



武田信廉

影武者を演じた!?
信玄を支えた弟
部将としては、親族衆を固め、また情報収集などを内政的な仕事にも手腕を發揮した。勝頼が奮戦した滝山城の戦いでは、その補佐に当たっている。

信廉は骨相が信玄に似ていることから影武者をつとめたともいわれ、後年の信玄が陣中で病没したとき、混乱を未然に防ぐため、病氣の信玄に人との兄とは性格を異にし、芸術家としても知られる。一軍の将として信玄本陣を守り、また内政的な仕事にも手腕を發揮した。勝頼が奮戦した滝山城の戦いでは、と甲府に引き上げることに成功した。織田信長は、信玄の計報を謀略と疑つたという話もある。

写真=「武田二十四将図」(高野山文化財保存会蔵)



6

えりんじかいさんどう
惠林寺開山堂（附棟札）一棟

指定年月日 平成8.2.8 市指定
時代・構造 江戸時代、一重入母屋造
法 量 術行6間、梁間3間、銅板葺

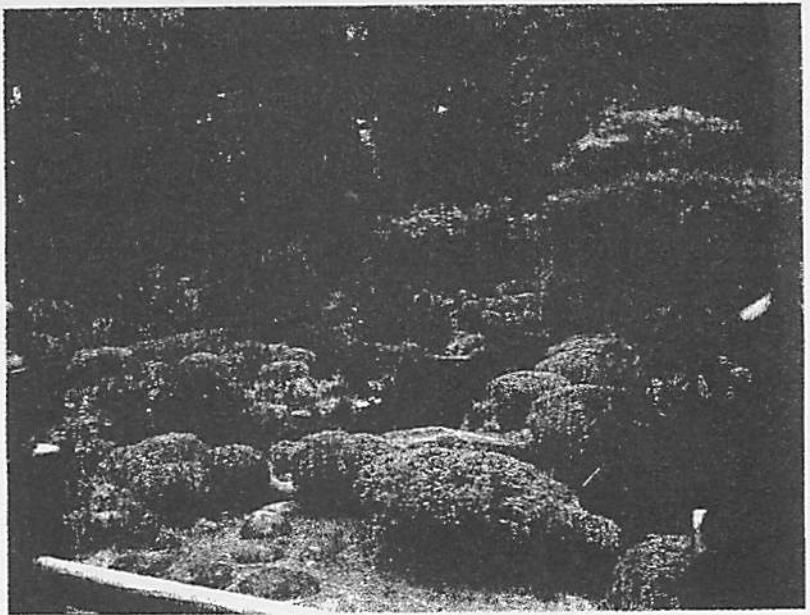
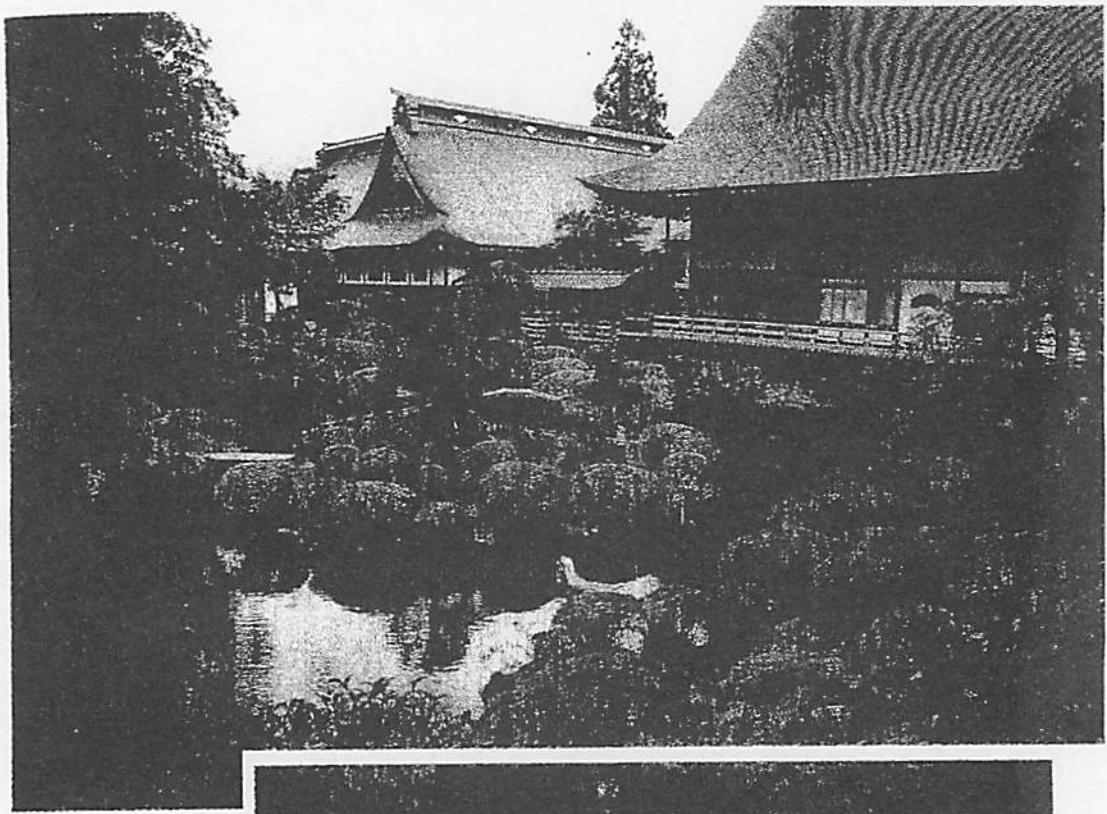
本堂前の旧仏殿跡に位置しており、昭和47年に本堂裏手西北部より移築された。正式には開山祖師堂といい、惠林寺を開いた夢窓国師（諱疎石・七朝帝師）木像（県指定・24頁参照）を安置するが、快川和尚と末宗和尚の木彫坐像も堂内内陣に安置されている。

重層仏殿形式となっている堂宇規模は術行六間、梁間三間、一重入母屋造、銅板葺き。建物の構造は正面側奥行き四間分と背面側奥行き二間分は、基壇レベル、床、組物、長押の有無など明らかに異なる形式が接続されており、外観上は脇障子で仕切られるよう隔てられている。絵様ならびに技法、装飾等から見た場合、古建築研究者の間における一致した見解では奥側つまり背面二間分は以前から存在していた部分であって、これに前面部は棟札に見られる時期の増築工事によって接続されたとの見方が有力であるが、現状遺構から見て堂塔建築物としての価値はきわめて高く、とくに内陣の形式および造作は第一級の構成との折紙が付けられている。

棟札の年紀は「元文五龍轉庚申歳、孟夏十九日」とあり、江戸中期の元文5年（1740）4月19日（旧暦で四月を孟夏という）を意味している。施工主は惠林寺第43世大伽道癡和尚で、再建と記し、都料匠は小島飛騨守裔小島空之丞家利、小工同重次郎家成。飛騨守は成吉といい、武田氏時代からの惠林寺番匠（『甲陽軍鑑』）で惠林寺の被官として五貫文（約50石）の知行を受けていた。

この棟札に惠林寺を本坊として山内に子院、塔頭の岩松院、継続院、長興院、栖松軒、望月庵など15カ寺の存在が記されている。めずらしいのは前面部軒裏に波紋、雲紋の彫刻が填め込まれ、正面左右に雷神・風神の二神が埋め込まれる意匠が施されている。

◎



めいしょう　えりんじ　ていえん
名勝 惠林寺の庭園

指定年月日 昭和 19. 6. 26 国名勝
所 在 地 塩山市小屋敷、本堂北側
庭園の面積 2.132m² (646坪)

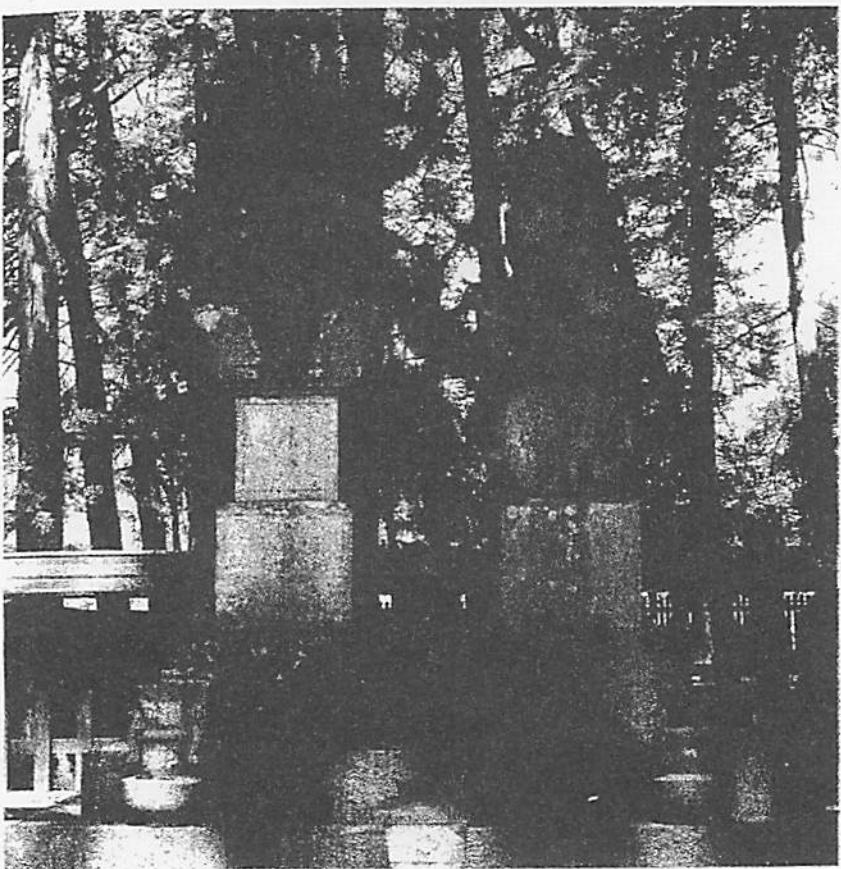
国の名勝指定である惠林寺庭園は、開山夢窓国師の手による比較的初期の築庭とされている。のちに京都・天龍寺、西芳寺(苔寺)・岐阜・永保寺などの築庭で完成をみる夢窓流造園の原形とされ、作庭当時のおもかげを今日によく伝えており、歴史的に、また史料的な価値は高い。『夢窓年譜』によると国師56歳の作となっている。したがって天龍寺、西芳寺庭園よりほぼ10年早い時期の作庭ということになり、鎌倉末期の禅宗庭園としては貴重な遺構といえる。

世に夢窓流庭園と呼ばれる国師独特の庭園は、大本堂の裏手北側に展開しており、遠望する奥秩父連峰をはじめ標高2,020メートルの乾徳山を借景とし、その中間には笛吹川上流筋の村落を取り入れた雄大な規模を誇る名苑である。庭内はふところが深く上下二段の組み合わせで、上段は石組に特徴をもつ枯山水で築山と大小二つの滝(滝)や石橋が配され、下段は心字形の池を中心とする池泉回遊式で、奇岩奇石の配置など随所に国師一流の手法を見ることができる。滝口からの流路にはこぶし大の白石が敷き詰められており、造園当時はこれが流水と見立てられていた形跡を感じる。

本来、禅宗寺院の庭園は観賞が目的ではなく、禅僧の生活、修行のすべてを打ち込む禅林文化の結晶であるといわれている。つまりまったく作為のない大自然の姿、限られた風景再現の中に森羅万象を見出そうとする禅観一味、いうところの一色一香、無非中道、無為自然いう玄旨甚深、禅境の法味が盛り込まれた道場である。

江戸時代中期、甲府藩主柳沢氏が「甲府八景」の一つに選んだ。

「惠林晚鐘」 静難る 夕濃 可憐乃故衛伎々亭
見礼ハ 心の 池裳にごら寿



はるのぶ
武田晴信（信玄）の墓 一基

指定年月日 昭和33.6.11県史跡
時代・形状 江戸、五輪・宝篋印塔
墓域の面積 184.8平方メートル

武田晴信すなわち信玄の墓塔のこと、信玄が永禄7年（1564）12月1日、自らが菩提寺と定めた惠林寺本堂西側の信玄靈廟「明王殿」裏手に存在する。この墓所を靈域と称するが、面積184.8平方メートル（56坪）が史跡指定地で、ここに全高349.6センチ（うち三段台座69センチ）の五輪塔一基（右側）と全高369.6センチ（台座同、左側）の宝篋印塔一基が建立されている。

この宝篋印塔の返花台座（基礎）裏側の陰刻銘文により五輪塔、宝篋印塔はともに江戸時代初期の寛文12年（1672）4月12日、信玄百回忌が嚴修された際に時の惠林寺住持荆山玄紹（正統至聖禪師）が武田家の遠孫、旧臣子孫592人の淨財を得て再建したものであることを知る。墓石は泉州石（大阪府泉南郡）の名石で、石工も泉州の「黒田伝蔵藤原安吉鐫勒」と宝篋印塔右横に刻まれている。

信玄が病没する10年前の永禄7年に惠林寺を自らの菩提寺と定めたことは、時の住持だった快川和尚（諱紹喜、大通智勝国師）に宛てた「惠林寺領之事」の証文が同寺に保存されていることでも明らかであり、また墓所についても信玄没4年後の天正4年（1576）4月16日に武田勝頼が施主となって同寺で本葬を執行、この仏事一切について快川国師が自らの手で「天正玄公仏事法語」（県指定文化財、34頁参照）に記録していることで知ることができる。

信玄は武田信虎の嫡男で大永元年（1521）11月3日、甲府・石水寺（積翠寺）の要害城で出生、天文10年（1541）21歳で甲斐国主となった。戦国期を代表する智勇兼備、詩歌等の学芸にも長じた名将といわれ、上洛戦途次の元亀4年（1573、天正1年）4年12日、信州・駒場（下伊那郡）の地で53歳の波乱に満ちた生涯を閉じた。病死と伝えられるが、死因については諸説あって特定されていない。

◎



やなぎさわよしやすふさい はが
柳沢吉保夫妻の墓 二基

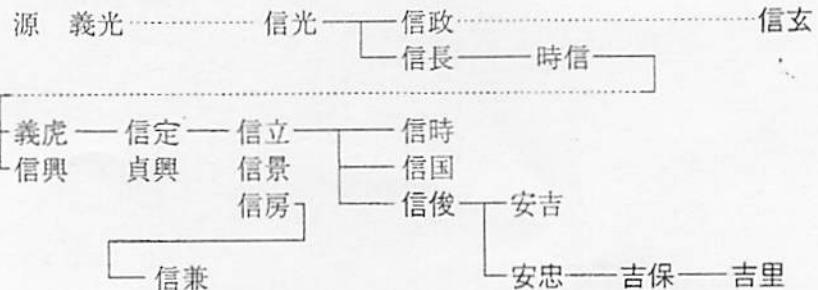
指定年月日 昭和 62. 12. 12 市史跡
時代・形状 江戸、花崗岩六角二重蓮座
法 量 227×120cm、200×120cm

江戸時代中期の甲府15万石藩主柳沢美濃守吉保と正室定子（曾孫氏）の墓塔である。花崗岩で二重蓮座台、六角形状で吉保の墓が高さ227センチ、幅120センチ、また定子夫人の墓は高さ200センチ、幅120センチある。吉保が在世中の宝永5年（1708）に甲府城外の北方に位置する岩窪の地（甲府市岩窪町）に菩提寺として建立した黄檗宗の龍華山永慶寺と夫人の牌所となっていた塔頭真光院にあつたものを、享保9年（1724）3月、吉里の代に大和郡山へお国替えになった折、吉里の懇望で急速恵林寺へ改葬された経緯による。

吉保は五代将軍徳川綱吉治政下、側近として文治派政治を推し進めた政治家であるが、綱吉時代の弊政を一身に背負わされたため、史実とは裏腹に後世にまで悪官僚視され、損な役まわりを引き受けざるを得なかった人物であるが、いずれも後人の作為的によるもので、定子夫人も賢婦人であったことは史実によって明らか。

吉保墓塔の正面には「永慶寺殿保山元養大居士」と陰刻され、夫人墓塔も陰刻で「真光院殿海月映瑞大姉」とある。吉保は正徳4年（1714）11月2日、57歳で江戸・駒込の大義園（柳沢家別邸、東京都文京区駒込、国指定特別名勝）で死去、定子夫人はその前年の9月5日、同別邸で死去（58歳）しており、ともに甲府へ移葬されて黄檗宗総本山の萬福寺（京都・宇治市五ヶ庄）第八世の悦峰道章禪師（永慶寺開山）を大導師に葬儀が行われた。悦峰禪師は中国・浙江省出身の渡来僧。恵林寺での改葬に立ち会った大迦道癡禪師（恵林寺43世）の記録に「享保9年4月12日七ツ過、両柩、竜華山御立、夜ハツ半、恵林寺仏殿に御入り…」、つまり午後4時ごろ甲府を出立、明け方の午前2時半ごろ恵林寺へ到着したとある。

【柳沢氏略系図】



放光寺



吉保の祖父 柳沢兵部丞信俊は、信玄・勝頼の二代に仕えた在地武士集団・武川衆の頭領ですが、その祖先をたどると甲斐源氏の流れを汲み、武田氏とは先祖を共通する同族関係にありました。

信俊は初め青木氏を名乗っていましたが、勝頼の時代、頭領家柳沢氏が軍令に背いて失脚したため、信俊が柳沢氏を継ぎ武川衆の頭領となったものです。

さて、柳沢氏の治政下、藩主としての業績は甲府城の整備と城下町形成に意を尽くしたことは当然ですが、惠林寺に対しても祖先崇拜の念に厚い、いわば同族意識をもって伽藍整備にも力を入れたことは「惠林寺旧記」にも記されているところです。 ◎

惠林寺の北にある。山号は高橋山。平安末期の元暦元年（1184）、甲斐源氏の武将安田義定が、真言密教の道場であつた一之瀬高橋（塩山市）の法光山高橋寺を移して創建したという。

鎌倉初期（13世紀前半）作の仁王像（県文化財）がにらみをきかせる仁王門を入った境内は、イチヨウ・梅・サルスベリ・キンモクセイ・杉などの古木が茂り、静かなたたずまいだ。正面にたつ入母屋造りの本堂は、江戸前期の元禄年間（1688～1704）の建築で、右手に続く庫裏は、慶長年間（1596～1615）の建立といわれる。

宝物館には、大日如来、天弓愛染明王、不動明王（いずれも国重要文化財）が安置されてある。3体とも平安末期の寄木造り像だ。

夢窓疎石——七朝帝師

夢窓疎石（一二七五～一三五一）は、あまりにも高名である。そして中世に一大流派を築いた大禪匠である。生前に三人の天皇から、また死後に四人の天皇から合計七つの国師号を贈られたので、夢窓国師のことを七朝帝師と呼んで、尊崇の念を一身に集めたのである。

建治元年（一二七五）十一月一日、伊勢の国の豪族、宇多天皇九代の孫・佐々木朝綱を父に、平政村の女^{むすめ}を母に、現在の三重県津市片田井戸町に生まれた。國師生誕の地は現在瑞林寺が建立され、その聖地を守っている。

夢窓四歳のとき、佐々木一族は甲斐の国に移住していった。六歳にして真言宗の空阿上人より仏教について学んだのだが、上人は、仏教のみならず孔子、孟子、老子、莊子をはじめ世間一般の教養課程にまで及んだという。十八歳になつていよいよ出家を決心し、叔父にあたる明真講師のすすめによつて、南都奈良東大寺の戒壇院の慈觀律師のもとに具足戒を受け、名を智曜^{ちやく}といつた。智曜は、教理教学は造詣深くなつても今ひとつ満足できないものがあつたらしい。

ちょうどそんなとき、教学の指導を受けていた講師が病におかされて、七顛八倒の苦しみの中に死んでいった。そのありさまを見た彼は、この生死の現実問題を根本的に解決するには、教外別伝の禅宗を学ぶべきだと思い、百日の祈願を行じたのである。その満願の日に、中国の疎山と石頭の二大寺の夢を見た。このときより疎石と名を改め、靈夢によつたことから夢窓と号することとしたのである。

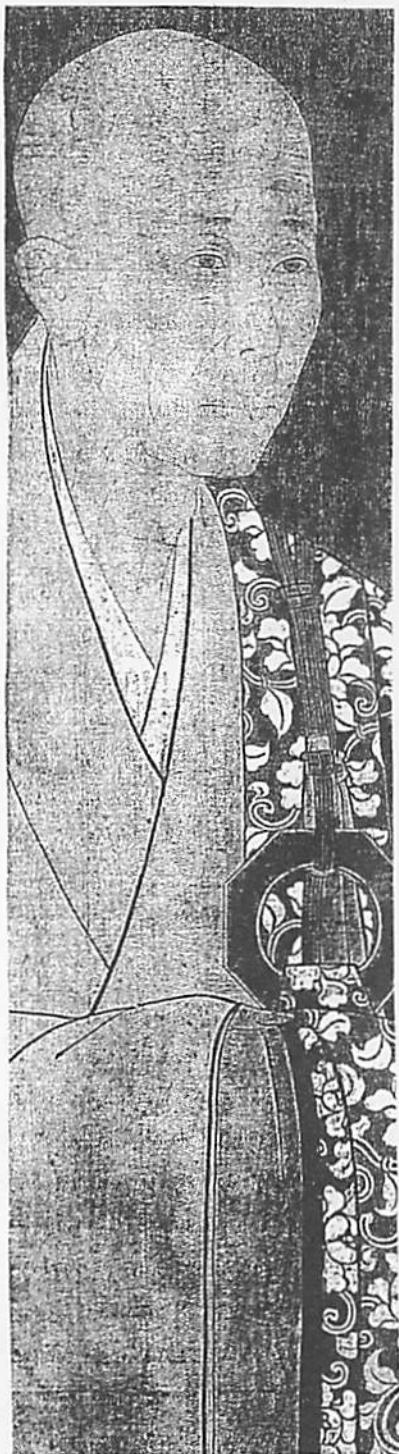
さて、「疎石」と改めた翌年永仁二年（一二九四）、京都に上り建仁寺の無隱円範について禅宗に帰したのである。

永仁五年、二十三歳になつたとき、再び京都の無隱のところへ帰つたのだが、その後、正安元年、中國から高名な一山一寧禪師が来朝した。

一山は、頑極行弥の法を嗣いてすでに高徳の誉れ高かつた。大徳三年（正安元年・一二九九）、元の世祖から妙慈弘濟大師の号を賜わり、その命によつて同年八月、西磯子曇、石梁仁恭らとともに来日、太宰府に到着したのだが、執權北条貞時に、元の遊偵であろうと疑われて、伊豆の修善寺に幽閉された。だが、ほどなく類いまれな高徳であることがわかり、鎌倉に招かれて建長、円覚、淨智などに住したのだが、夢窓は、この一山について学んだのである。

そのことが大いに夢窓に影響して、のちに一山の書風をも習うほどになるのである。一山は、唐の名筆、顏真卿の書風を取り入れ、特に草書に優れて、わが国書道史上にも重んぜられるのだが、夢窓もまた優れた草書を残している。

その後、仏国國師高峰顕日（けんじやく）の道風を慕い、鎌倉の万寿寺に顕日をたずねたのである。高峰顕日は、後嵯峨天皇の皇子で、宋から來朝した仏光國師無学祖元の法を嗣いで高雅清淡、その徳を慕うもの多くあつた。



正中二年（一二三一五）、夢窓五十一歳のとき、後醍醐天皇の再三の勅命によつて南禪寺に住することになる。

けつして大寺名刹に住することを好まなかつたのだが、しかし人々は放つてはおかなかつた。嘉曆元年には伊勢に善応寺を開き、翌二年、執權北条高時の請により一夏を鎌倉の淨智寺に過ごし、八月には瑞泉寺を開いた。元徳元年には、長老たちの懇請によつて円覚寺に入り、荒廃の極にあつた円覚寺を一年たらずで復興し、翌年には甲斐に入つて牧の莊に惠林寺を開いた。

元弘三年、後醍醐天皇の勅命により、嵯峨の大堰川畔の、亀山法皇の離宮のあたりに、第二皇子世良親皇の菩提をとむらうために靈龜山臨川寺を創建して開山となつた。この年、天皇は夢窓の弟子となり、夢窓の号をそのまま国師号とされたのである。その年の十月には再び南禪寺に住した。

延元元年（一二三三六）、建武の中興は挫折し、天皇は吉野に遷られることとなつた。夢窓は、直ちに南禪寺を辞して臨川寺に帰り、ひたすら聖運の恢復を祈願し、延元四年には西山の西方寺を改めて西芳寺として復興し、無縫塔（供養塔）を建てて水墨画のような庭園を造つた。これは、日本庭園史上注目されるもので、のちの枯山水の庭の元となるべきものといわれる。

生來の隠遁的な性格から、一転して権門に接近していくのも、南北両朝の対立をなくし、元弘以来の幾多の戦乱に終止符を打つことがそのねらいであつたはずである。そして夢窓生前には、ついにその願いは達成されなかつたのだが、夢窓の高弟の春屋妙葩および足利尊氏の孫の義満によつて、元弘以来六十年目にして和議が成立し、夢窓の平和への念願がようやく果たされたのである。

夢窓が室に入るなり顕日は問う。

「円覚和尚（一山）はおまえに何を示したかいってみよ」

「わが宗に語句なく、また一法の人にはたうるなし、ということですが」

そこで顕日は、「なんでそのとき、和尚漏逗（もうろく）少なからず、といわなかつたのだ」と一喝したのである。

この顕日の一喝で夢窓は言下にハツと氣づくことがあつた。顕日のもとを去つた夢窓は、奥州白鳥に行き、内草山の山中に閑居して大いに氣力を養い、翌嘉元三年二月、内草を出て常陸の国臼庭（うすば）に閑居した。その年の五月のある一日、真夜中に及んだ坐禪を止めて就寝しようと床へ上がるとして、あぶなく床から落ちそうになつた。そのハツとした瞬間、今までの疑問が一時に晴れて、痛快な境地を体験したのである。このときの偈に、

多年掘地覓青天　多年地を掘つて青天を覗む

添得重重礙膺物　添え得たり重々礙膺（もと）の物

一夜暗中颶碌甄　一夜暗中碌甄（ろくせん）をあぐ

等閑擊碎虛空骨　等閑に擊碎す虚空の骨

「長い間、天をもとめて地を掘るような見当ちがいをしていた。その上にまたいらぬものまで取り込んでいたのだが、昨夜、暗闇の中で大風に会い、何もかも吹き飛んでしまい、骨の髓まで碎け散つてしまつた」というのである。自ら煩惱妄想を見事に打ち破つてしまつたのである。そして徳治二年に、顕日が再び万寿寺に住するに際し、夢窓もこれに随つて行き、ついにその法を嗣いで、仏光国師所伝の法衣を証（ほうえ）として授けられた。夢窓三十三歳のときである。

善光寺（ぜんこうじ） 甲府市善光寺三丁目。浄土宗で山号院号は定額山淨智院。別称甲斐善光寺。本尊は阿弥陀如来（善光寺如来）。開基は武田信玄。開山は信濃善光寺大本願37世鏡空。武田信玄は信濃善光寺の本尊である三国伝来の阿弥陀如来はじめ数多くの寺宝が



戦火にかかるて失われるのを惜しんで1557（弘治3）年に甲府へ移し、翌1558（永禄1）年に板垣の現在地に伽藍（がらん）を建てて安置した。これが甲斐善光寺の始まりである。善光寺如来の甲府到来を甲斐国中の男女が喜び迎えたと「塩山向嶽禪庵小年代記」にある。その後金堂の本普請が続けられ、1565（永禄8）年3月に落慶入仏供養が行われた。武田氏滅亡後も歴代領主の保護を得て、徳川家康も1583（天正11）年寺領3カ所計25貫文を寄進している。本尊の善光寺如来は1582（天正10）年織田信長が岐阜へ移し、本能寺の変後、子の信雄によって尾張甚目寺へ、さらに翌11年家康によって遠江鴨江寺に移されたが、同年10月甲府へ帰座した。ところが1597（慶長2）年、豊臣秀吉は京都方広寺大仏殿への移座を命じ同年7月8日、如来は大本願智慶以下供奉、人足500人・伝馬236疋を連ねて甲府を出発、7月18日無事入洛したが、翌3年8月には40余年ぶりに信州善光寺へ帰還した。一方、本尊や大本願らの去った甲斐善光寺は、残留者たちの努力で法燈が維持され、従前の前立仏が新たに本尊とされ、また領主浅野長政は本堂を莊嚴にするため千塚村（甲府市）光増寺の阿弥陀三尊像と北宮地村（韮崎市）大仏堂の阿弥陀三尊像二組六体を奉納した。1685（貞享2）年には一国門中の触頭となり、直末36寺・又末100余寺に及んだ。その後金堂が大破したので1721（享保6）年、城主柳沢吉里から修復料が与えられ同13年に完成。ところが1754（宝暦4）年2月7日、門前の農

家から出火し、類焼にあってそれまでの伽藍はすべて失われた。現在の建物は、その後再建されたもので金堂は1766（明和3）年から30年を要して1796（寛政8）年に完成した。この時の工事の遅々たることにより、世に「善光寺普請」の名が起つた。近世の寺領は御朱印領30石4斗余り、境内1万1,877坪、山門外坊舎地1,164坪、供僧敷地7カ所1,672坪、山林方5町という広大なものであった。1868（明治1）年の神仏分離令により寺は大きな打撃を受けたが、歴代住職や檀信徒の努力で法燈は維持された。1945（昭和20年）年7月6日夜の甲府大空襲にも奇跡的に焼失を免れた金堂と山門は、昭和30年6月に重要文化財に指定された。1959（昭和34）年8月修理工事の最中、台風7号によって山門は倒壊、金堂は傾くという思わぬ災害を受けたが同37年3月、金堂・山門ともに完工し再びその威容を誇っている。金堂は撞木造りといわれ屋根がT字形に交わり、高さは20余尺という関東最大級の木造建築物である。金堂、山門、本尊の阿弥陀如来、浅野氏の納めた2組の木造阿弥陀如来はいずれも重要文化財である。その他多数の彫刻群があり、優れた文化財が多く枚挙にいとまがない。境内には露座の大仏（釈迦如来）や水子地蔵堂があり、金堂の右手裏には1591（天正19）年甲斐の国主となり、その後豊臣秀吉の朝鮮出兵に出陣し釜山で病死した加藤光泰の墓がある。

（池田 友治）

られる中曲輪の北西隅に、東西22m、南北18mの石垣で囲んだ小高い場所があり、御旗屋跡または毘沙門堂と呼ばれ、先祖伝来の重宝などを格納した所といわれる。中曲輪から堀を隔てて西曲輪があり、もとは橋によって連絡されていた。ここは夫人・侍女や人質などの住居があったといふ。また東曲輪の北には堀を隔てて隠居曲輪があり、信玄の母の大井夫人が住んでいた。西曲輪の北には味噌曲輪、その北には信玄の弟信廉の屋敷があった。また、西曲輪の南の土塁が切れた外堀を越えた所には梅翁曲輪があり、藏前衆と呼ばれた代官たちの事務所だった。

1919(大正8)年、この館跡に武田氏の偉業をしのんで武田神社が造営された。毎年4月12日には盛大に例祭が行なわれ、騎馬行列もあり、参道は見物客で埋まる。また、元日はつもうでの初詣は県下で最も多くの人が参詣に訪れ、県民から広く親しまれている。参道沿いには山梨大学もあり、この一帯は文教地区でもある。



古府の図(『甲府略誌』)

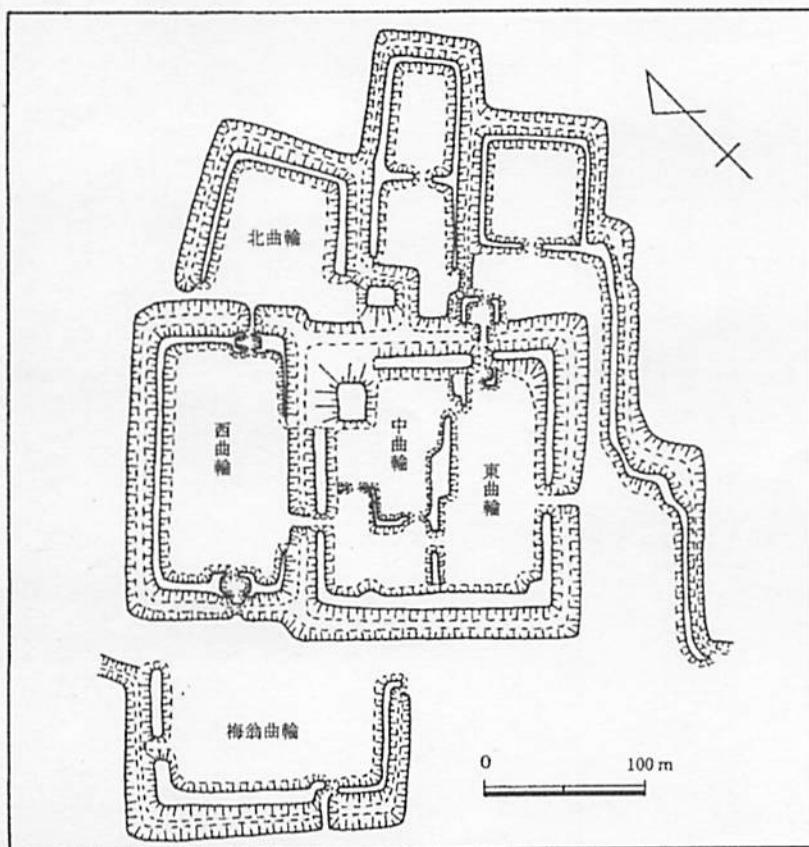


武田氏館跡

▶甲府市古府中町2611 <→地 p.108, 123>
▶中央線甲府駅バス武田神社行終点下車1分

バス停のすぐ前のうっそうと茂った森の中に武田神社がある。祭神は武田信玄(晴信)。この神社を中心とする一帯が武田氏館跡(国史跡)である。現在の甲府市北辺にあたり躑躅ヶ崎^{つつじがさき}と呼ばれる所である。相川扇状地の開口部で三面を山で囲まれ、南に甲府盆地がひろがった天然の要衝の地である。1519(永正16)年、信虎は居館を石和(館跡は甲府市川田町)からこの地に移して領国經營の中心とした。以後信玄の治世33年間を経て、1581(天正9)年に勝頼が新府城(韮崎市)に移るまでのあいだ、六十余年間武田氏の住居と政庁を兼ねた本拠であり城下町も整備された。館の主要部の規模は東西約284m、南北約193m、周囲には高さ約3mの土塁を巡らし、その外側は深い堀でとりまかれていた。追手門は東に向かっており、南側は広く開けていて敵の侵入をうけやすいが、東側は丘陵が迫り守りやすかったからである。追手門の外には馬出しと呼ばれる防塁があり、これは甲州流の築城法といわれる。

館の内部は東・中・西の三つの曲輪^{まがわ}からなり、主殿があつたとみ



躑躅ヶ崎館縄張図『山梨県の中世城館跡』(山梨県教育委員会)を参考に作図

甲斐国 武田氏

甲斐国を中心に勢力を広げ、戦国時代に武田信玄など著名な武将を輩出した武田氏は清和源氏が本姓であり、新羅三郎義光の子義清がその祖であり、十二世紀中頃に甲斐へ土着し、以後、その地に勢力を広げることになった。十二世紀末の源平の争乱に際しては源頼朝に協力したことにより、甲斐國守護職に任せられて戦国期に至るまでの職を継承していく。また、この他安芸守護の室町期には若狭國守護にもなり、一族を各地においていく。だが、戦国期初期においては永正四年（一五〇四）に信虎が家督を相続した頃には一族間の抗争が激しく厳しい状況に追い込まれていた。

信虎は一族間の抗争を収めていく一方で、永正七年には都留郡の有力国人小山田氏を屈伏させ、同十二年には巨摩郡の大井氏を攻めるなど国内統一事業を進めていき、天

文元年（一五三三）頃までには国内統一を果たす。こうした中、永正十六年には居城を石和から甲府盆地の中心地の鄒躉ヶ崎館に移し、甲府の建設にとりかかる。一方、対外的には相模の北条氏と対立し、駿河の今川氏とは氏親の代では対立し、争ったが義元が当主となると娘を嫁して同盟関係を結ぶに至った。さらに信濃進出へ向かうも、専制化が進み、重臣層の離反を招き、天文六年六月には長男晴信（後の信玄）によつて駿河の今川義元のもとへ追放された。

父を追放し、家督を継いだ晴信は信濃への侵攻を進めた。天文十一年には妹婿であった諫訪頼重を滅ぼし、次いでその一族の高遠頼経も滅ぼし、さらに小県郡の村上義清や更級郡の小笠原長時を攻める。天文十七年には小県郡上田原で村上氏に敗れるが、同二年には村上・小笠原氏を越後へ敗走させた。敗走した両者は越後の長尾景虎（後の上杉謙信）を頼り、援助を求める。それに応じて景虎は同年八月に信濃へ出陣し、更級郡川中島で初めて晴信と対陣した。以後、両者は永禄七年（一五四四）までに主な

対戦だけでも五度にわたり川中島で対決する。この北信濃への侵攻の他に南信濃へも侵攻し、天文二三年（一五四五）には木曾郡の木曾義昌を降伏させて永禄七年頃までに信濃を制圧している。尚、永禄二年に晴信は出家し、信玄と号している。この間の外交政策に目を向けてみると駿河の今川氏、小田原の北条氏とは婚姻関係を結ぶ事により三国同盟を形成していた。

信濃をほぼ制圧した後は上野西部・美濃東部・飛驒への侵攻を開始する。永禄七年七月には配下の山県昌景を飛驒へ派遣し、三木氏等を降伏させ、同九年九月には、上野西部の反武田勢力の拠点である箕輪城を攻略している。だが、永禄八年には長男義信の謀反が発覚して義信は幽閉され、これに関係した重臣が処断された。同十年には義信を切腹させ、その妻であった今川義元の娘を氏真のもとへ帰し、今川氏との同盟關係を絶つた。翌十一年には駿河へ侵攻し、月、信玄は陣中で病を発し、一旦甲府へ帰陣する途中、同月十一日に死去した。

さて、信玄期の内政として主要な政策をあげてみると、領国の法として「甲州法度之次第」の制定、信玄堤と俗称される治水政策や新田開発、金山の開発があり、その他にも局地的ではあるが検地を実施している。

信玄の死後、家督を継承したのは勝頼であるが、信玄の遺言によりその死は三年間隠され、正式に継承したのは天正四年四月である。勝頼は信玄の政策を引き継ぎ、徳川・織田と抗争し、天正二年六月には遠江の高天神城を攻略した。だが、翌三年五月の長篠（現在の愛知県新城市）の合戦で敗北し、多くの重臣が戦死した。この後、勢力が後退していく。同五年正月、北条氏政の娘を妻に迎えたが、翌六年に謙信の死後、後継者を巡って養子の景勝（上杉謙信の

天正九年に蘿崎に新府城を築き甲府を離れ、防御を固めようとしたが、翌十年には穴山信君等の縁戚関係にあった家臣が離反した。そして、二月には織田信忠が離反した木曾義昌を救うべく兵を起こして進入し、ついに信長の甲州征伐が開始され、さらに都留郡の領主小山田信茂にも離反され、勝頼は三月十一日、息子信勝および一族ともに田野天目山において自害した。こうして甲斐武田氏は滅亡するに至つたのである。

武田氏の最大勢力と居城

甥）と景虎（北条氏康の息子）の争いが起ることで、勝頼は景勝を支持し、妹を景勝に嫁して同盟を結んだため、景虎を支援する北条氏とは対立するようになった。以後、北条氏と徳川氏に挾撃されることになり、領国は疲弊し、苦しい状況へ追い込まれていった。

獲得し、西上を目指した。その政策を継いだ勝頼は遠江・三河へ進出した。天正三年（十五五）の長篠の合戦の敗北前に得たこれらの地域（甲斐・信濃・駿河・西上野・東美濃・飛驒・三河と遠江の一部）が最大勢力と言えるだろう。長篠の合戦以後は周囲の大名に押され次第に衰退していく。

